

小平桂一氏ロングインタビュー

第11回：総合研究大学院大学長時代



高橋 慶太郎

〈熊本大学大学院先端科学研究部 〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪 2-39-1〉
e-mail: keitaro@kumamoto-u.ac.jp

小平桂一氏インタビューの第11回です。小平氏は国立天文台での大役を果たし、ハワイなどでの1年間の休養を経て総合研究大学院大学の学長に就任します。比較的暇なのではないかと引き受け2001年4月から2008年3月まで学長を務められましたが、この時期は大学共同利用機関と国立大学の独立行政法人化の混乱期でした。その両方の混乱の中で小平氏は暗中模索しながら総研大を運営していき、総研大の特徴を活かした分野融合や国際化に奮闘します。

●ハワイ滞在

高橋：国立天文台を2000年3月に退任して、すばるの完成とほぼ同時期ですね、その次の年から総研大（総合研究大学院大学）の学長になったということですね。

小平：次の年です。そこは1年空いてるんです。

高橋：1年休憩してということでしたね。

小平：僕は天文台で1980年ごろからすばるをやって、台長が終わるまで20年間ですね。だいぶくたびれましたから、1年は何も役職はやりたくないで遊びたいと思って。それで遊ぶ計画を立てていて、まずハワイに行く。それまでもハワイは何度も行ってましたけれど、ゆっくりいたことはないんで、まあ台長が終われば遊びに行ってもいいわけで、まずハワイに3か月行くと。

高橋：そんなに長くいたんですか。ハワイのどこにいらしたんですか？

小平：ハワイのヒロのね、町のちょっとはずれにペペエケオっていう町があるんですよ。そこは当時赴任した人たちが何人か住んでたところの近くなんですけど、果樹園地帯なんですよ。バナナだとかマンゴーとかいろんな熱帯果樹を作ってる

広々したところの1つで、バナナ園だったところなんです。そこにB&Bをやってる建物があるんですけど、そのB&Bを建てる前にできた小屋があって、大学関係者に安く貸してあって、ハワイ大学天文研究所の元所長さんのドン・ホール、ドナルド・ホールが教えてくれたんです。なんかただみたいに安いところで、ただ猫が2匹とアヒルが4匹だけ付いてるんです。動物の餌をB&Bのおばちゃんが買って持ってきてくれるんだけど、その動物の世話をするっていうのが条件で、そこを借りたんです。それで3か月住んで、まあ車があるから観測所へも顔を出したり。

高橋：もうその頃にはすばるは稼働してるわけですよ。

小平：すばるはもう動いてるわけですよ。ハワイに行ったのは2000年の5月からですから。まだverification（検証）の頃で、たぶん共同利用は2001年からじゃないかしらね（正確には2000年12月から）。だからその頃はいろんな観測装置でテストデータを取って、僕が後に解析することになったアンドロメダ星雲の画像（第9回参照）なんてのは、その頃に撮られたやつなんですよ。そのときはverificationだから、こういうのを撮っ

てほしいって言えばまあいろいろ撮ってくれるわけで、岡村（定矩）先生とか宮崎聡さんとかに言って、アンドロメダの南西部の画像を何色かで取り揃えてもらったんですね。その中からまあシャープなやつを選んで、後で仕事に使ったんです。それでいろんな観測装置の担当者がヒロにきたのでお会いできて、非常に楽しかったですね。

高橋: そういう verification とかテストの作業っていうのは順調に行ってたんですか？

小平: 現地で覗いたことはあるけれど、夜ずっと付き合ってたってことはなかったですね。見学させてもらうのに近くて、夜半くらいまで降りてきて。だって台長をずうっとやってたから、観測のソフトがどうなってるかとか、観測手順とかそういう具体的なことは自分ではほとんどできなくて、若い人がみんな一緒にやってくれてたから。申し訳ないけどそういう状態だったですね。

高橋: じゃあたまに様子を見に行つて。

小平: まあ上がってってこともあったけど、やっぱり4,200 mだからそう遊び半分に覗きに行くんじゃ申し訳ないんで。ですからだいたい下に行つて、ハワイ大学のヒロ校で講演をしたり授業をしたり。ハワイ大学には天文を取ってる人たちが結構いたんです。だからそのときはハワイ大学ヒロ校の特任名誉教授っていうのか、榮譽教授っていうのか、そういうのを滞在中ずうっとやって、後は寄付したカヌー（第10回参照）がそのうちにくるっていうんで、その進水式とかやったり。それでカヌー一部の人たちと一緒に練習もしてましたね。

●ハワイ観測所の運営

高橋: その頃のすばるはもう心配するようなことはなかったですか？

小平: 心配したくない、もう（笑）。でも心配することはいろいろあったんです。それはやっぱり海外での観測所の運用っていうのは初めてなわけですよ。観測所が1997年に発足したときは海部

（宣男）さんをお願いして所長をやっていただいたんだけど、海部さんはああいう人だからやっぱりリーダーシップ志向が非常に強くて、物事をきちっと決めてそのロードマップに従っていけつていう。そういうようなことなんでプロジェクトは進むんですけど、それを一緒にやる人達は非常に大変なんですよ。だから台長の僕のところには苦情がたくさんきたわけですよ、きつくてやつてられないと。

でもまあそれも1つのリーダーの在り方なわけですね。僕はそういうことができないたちなんです。僕が東大の学生で教養学部には学費値上げ反対のデモが盛んだったんだけど、デモに行つてみたら我々は旗を担いで一生懸命駆け足してるのに、組織委員長はなんか車に乗ってね、ラウドスピーカーでもって「がんばれ」とか言ってる。それでこん畜生と思ったことがあってね、それ以来とていうか、まあそういう性格なんですよ。けど。だけどいい加減にしてると組織って動かないところもありますからね、ある種の厳しさが必要で、特に新しいことをやろうと思つたら従来のやり方を超えてどんどん新しくしなくちゃいけないし、あるときは特攻隊的に仕事をしなくちゃいけない。僕はいろんな付き合いで会社の社長さんなんかを知ってるんですが、社長はこのくらい強面してないだめでですよ。かって話をする人もいるから、組織も大きくなればリーダーっていうのは強面とていうか、言うことははっきり言わないといけない。僕なんかあるポジティブな発言をするときには必ずそれに伴うネガティブなところに言及しないと気が済まなくなっちゃうんですけど、まあ海部さんはそういうところが少なくて自分の考えを非常にはっきりと持っておられたから、所長としては優れた所長だったろうと思うけど、それを一緒にやられた人たちの献身的な努力も高く評価してあげないといけないと思いますよ。ね。

けどまああれだけ能力もあるし、何より僕が

気に入って野辺山からきてほしいと思ったのは、海部さんが天文出身じゃなくて東大教養学部基礎科学科卒で、いわゆる日本の天文学闊っぴかそれの持つ臭さがなかったからですね。非常に分野が広くて偏らない。単に天文学科を進んできた人とは違う広さっていうか、彼の物の見方考え方の広さみたいなのがあったからね、僕はそれに惹かれましたね。

高橋: 海部さんご本人からも聞いていますが、いわゆる海部降ろしみたいなことがあったっていうことですね。

小平: ああ、それはだから海部さんの下で苦労した人達がたくさんいて、この所長ではやっていけないっていう苦情がいろいろきてですね。海部さんが電波からすばるにきて、それまで一生懸命やってきた人たちの上にくるような格好になって意外に思ったり不満に思ったりした人がいたことは確かです。ただやっぱり海部さんにはいいところがあるんでね、そういう苦情があるからって行ってじゃあ誰か代わりにね、すばるの完成が近い時期に海部さんに代われる人がいるかっていうと、それはまた問題で。だから僕はいろいろ苦情を聞いて「対応して善処します」とか言いながらも、結局は僕が退任して海部さんを台長に引っ張ってくるっていうのがソリューションだったんです。

高橋: やっぱりあれだけの大きなプロジェクトになると、そういう強力なリーダーシップというか、多少強引でもっていう……。

小平: ええ。まあそうでなくてうまくやる人もいるかもしれないけど、やっぱりああいう初めての外国の地での組織ですし、てきぱきと運ばないといけないわけでね。ぐずぐずしてられないわけで。だから僕としては台長として初代のハワイ観測所長に海部さんを任命するっていうのは当然の道筋だったんだけど、海部さんが観測所長になった後、割合早い時期からもう苦情が集中してたんです。だけど僕はまあ何とか言って延ばして

延ばして、僕が退任して海部さんに台長を譲るときまででしたけど、逆に言うとそれより先はもう海部さんはハワイで続けられないっていう情勢だったんです。相当いろんな意見が上がってきましたよね。

僕としては海部さんにハワイから戻ってきてもらおう。それで僕の後に台長になってもらおう。海部さんにはハワイ観測所長を3年で退いてもらおうということを僕はいろいろなどこで言ってたんですが、評議会の台長選考がかなり進んだ頃に海部さんがきて、「この後どういう仕事を振ってもらえるんでしょうね」っていうから、「台長になっていただくと思ってます」って、僕はまだ台長を続投できる立場にあったんですけど、「僕に話がきたら辞退します」って言ったら海部さんは「わかりました」って言ったんです。

高橋さんが言われたように、大きな組織が一定の期間内にある仕事を成し遂げなければならないとすれば、やっぱり相当強力なリーダーシップを発揮しないとイケないだろうと思いますね。僕なんかとてもできなかったんじゃないかと思うくらい、本当にね。特に鏡が届いた後、鏡を洗浄して付けるなんて作業のときは本当に大変で、うちの家内はNHKの国際放送の関係で行って取材してたんですけど、高い山の上だし、それはそれは大変だったですよ。それをもう有無を言わせずとにかくシフトを組んで仕事に行かせるというところは、まあたぶん、その時のチームの中ではやっぱり海部さんを置いてはなかなか得難かったんじゃないかという気がしますね。だから大きな事故が起こらなかったのが幸い、まあ1回くらい小さな事故が起きましたけど、大きなけが人は出なかったしよかったです。それはねえ、プラスがあればマイナスもあるわけで、いいところがなければ何とか降ろしにはならない。やっぱりその人がある程度上に立って采配を振るえているからそれを降ろそうとする人も出てくるわけで。

高橋: じゃあ小平さんとしては苦情がいっぱい来

るけれども、まあ何とかごまかすと言うか…。

小平: まあねえ、僕に対しての不満もあったと思うんです。台長がああいうふうには部を交代させると言ってるけれど、なかなかさせないじゃないかっていう批判はありましたよね、ありましたけど、僕としてはともかくのりくらり…。それにも僕が台長の間に海部さんを辞めさせていたら、彼がハワイ観測所の後に引き受けられるような適切なポストがあったかっていうと、当時は難しかったらと思うんですね。また野辺山観測所長なんかに戻すわけにもいかないし、それから副台長格っていうのもちょっとそぐわない。副台長みたいな副のつく仕事は彼はあんまり向かない人だと思いますよ。それから海部さんの力量からいうと野辺山観測所だけに収まってはもったいない、日本としてもったいない面もあったし、彼としても野辺山を出て世界的な舞台でいろんな人と付き合って仕事を広げられたっていうのは、まあ不満には思ってたんじゃないかという気はしますけどね。

高橋: 海部さんもそんなふうにおっしゃってましたね。

小平: それで海部さんが日本に帰って台長になって、それまですばるを推進してたグループの中から交代で所長を引き継いでいったんだけど、所員には外国生活が初めての人が多くて、いろんな生活習慣が違いますし、しかもやったことがない8mの望遠鏡の運用をこなさないといけないわけですよ。そういうので神経は使うし、4,200mの酸素の少ないところまで上がるですよ。山中は溶岩の急なところですからね、だから事故対策とか、まあ研究者もそうだけど一般職員もいますし。そうするとやっぱり精神的に不安定になる人も出てくるわけですよ。望遠鏡としてはできてるんだけど、観測装置はまだいろいろと手を入れてverificationをやって、それに伴って観測装置が立ち上がるたびに新しいソフトウェアもインストールして動かさないといけないわけだし、さら

にそれをどうやって共同利用に持って行くか。共同利用委員会みたいなものを立ち上げて、ルールだとか組織をきちんと立ち上げなくちゃいけない。結構大変だったと思いますね、最初は。僕はもう口出しをする立場ではありませんでしたので、大変だっていうのは感じたけれど特に立ち入って何かっていうことはしませんでした。

高橋: じゃあできてからも観測装置を立ち上げて、共同利用に持って行くまで大変な苦勞があったわけですね。

●ドイツ滞在

高橋: ハワイはご夫婦で一緒にですか？

小平: ええ、その1年間ずっと家内と一緒にです。すばるが完成するまではまあ家内のほうが大変だったみたいなもので、だから骨休めに2人で行くってことで。

高橋: じゃあ3か月ハワイにいらっしゃって、その後はどうされたんですか？

小平: 計画通りハワイに3か月いて、それからその年は8月にイギリスのマンチェスターでIAU(国際天文学連合)の総会があったので、僕はハワイから末娘がいるアメリカのボルティモアに数日寄って、それでイギリスに行ったんです。それで総会に出て、レンタカーでマンチェスターからロンドンまで少し遊びながらずうっと行って、それでロンドンから今度は昔いたドイツのキールに行ってですね。キールに1週間くらいはいたかしらね、キール大学へ行って話をしたりして。まあその時はすばるの話をすればともかくいいわけで難しいことはなくて。それから今度9,10,11月の3か月はベルリン工科大学に客員教授でいるっていうことになって、ベルリンに行ったんです。ベルリン大学の物理の中に天文教室があるんですけど、そこでみんなと一緒に議論したりっていうようなことを3か月やって、で11月の終わりに日本に戻ってきたのかな、ええ。そんなんで、本当に最初に企画した通り骨休めをさせてい

ただくってという調子でしたね (笑)。

高橋: ベルリン工科大学にはお知り合いがいたんですか？

小平: それはね、そのときのベルリン工科大学の天文教室の主任がエルヴィン・ゼードルマイヤー (Erwin Sedlmayr) って先生だったんです。僕が1973年ごろにハイデルベルクで客員講師をやったときに、ハイデルベルク大学の理論物理研究所に彼がいたんですよ。それでその後交流が続いていて、僕が天文台長をやった頃かもしれないけど、野辺山なんかで星間空間のいろんな炭素系の物質が発見されたこととか、それから星間分子の高分子形成にグレイン表面での反応っていうのが話題になっていて、エルヴィンはグレインの表面のポテンシャルの中でサーマルに移動してるときに外から新しい原子が飛び込んでくるとそれと反応するとかそういう計算をしてたんです。それで面白いんで日本に呼ばば役に立つだろうと思って半年くらいいたかな。天文台の客員研究員だと思うんですけどね。それで東大の天文でも講義をして、あとはなんか新宿のピアホールに行って学生と飲むっていうような (笑)。

それで2000年の旅行の時にドイツに行くって言ったら呼んでくれたんですけど、彼は面白い男で、家がバイエルンの農家なんですよ、観山 (正見) さんは台長をやっても週末には広島へ帰って僧侶をやったけど (笑)、エルヴィンは家が大きな農家で、週末には家へ帰って畑仕事をやってた男なんです。もともと農家だったんで高等学校にも行かないでいたら、その村の牧師さんが、「お前もったいないから高等学校に行って大学にも行け」って言って、大学にきたっていうようなのでね。それで天体物理をやってるんだけど、ものすごい思想家、哲学的な人なんです。こんな分厚い本を何冊か書いてますけど、そういうんで星間分子やってるんだけどコスモロジーとかにも大変関心のある人でね。

その2000年の時は彼がちょうどベルリン工科

大学の天文学教室の主任をやって、それから彼は2000年から2001年かそこら2年間くらいドイツの天文学会長もやってたんですよ。それで僕をカール・シュヴァルツシルト賞に推薦したんですよ。それまで東洋人はその賞に全然縁がなかったんだけど。まあ彼とやったのは天文の議論よりも哲学的な議論のほうが多かったけど。面白い人でしたよ。それでベルリンに11月くらいまでいて、帰る頃に総研大の方の評議会でも次の学長をやってくれないかという話が来たわけですね。

●総研大学長

小平: 天文台は大学共同利用機関になったときから総研大の中で天文科学専攻っていうのになって、台長っていうのは自動的にその専攻長になるんです。ですから専攻長として総研大の教育には加わって、ほかにも天文に関係する岡崎の分子研 (分子科学研究所) だとか、核融合研 (核融合科学研究所) だとか、それから高エネ研 (高エネルギー加速器研究所) だとか、そういう他の共同利用機関との関係もあったから、僕は総研大に関心がなくなかったんです。そういうタコ足みたいな組織ですから、非常に大変なだけけど。

僕としては天文台を2000年に辞めた後ちょっと思ったことは、僕が助手だった1960年代から2000年の40年、天文学はものすごく発展したわけですよ、だけど同時に生命科学もものすごく発展したわけで、いろいろ新しいことがわかってきてるなどということに関心はあったけれど、とても頭の中に余裕がなくて頭の外に置いてきてたんです。だから生命科学も少し勉強してみたいっていう気があったんです。それで天文台をやめて1年経つ中で、天文台長までやって天文どっぷりですから他の分野に移るってわけにはいかない、でも副分野としてなんか勉強したいっていうことをちょっと考えたんです。他のいろんな大学からもきてくれないかって話はあったんですけど、みんなやっぱり天文学者としてっていう話ですか

ら。それで総研大の前の学長（廣田榮治）の任期が2000年度で終わるってことは、専攻長としていろんな会議で聞いてたんで、次に自分になるっていう可能性についてはまあ全くなくはないとは思ってたんですね。もし学長になったら基礎生物学研究所もあるし、遺伝研（遺伝学研究所）もあるし、それから葉山の本部に先導科学研究科っていうのがあって、その中に生命科学があったんですよね。だからそういう勉強をする余裕も少し出るかもしれないって気はあったんです。

高橋: 生命科学に興味をお持ちだったんですね。

小平: それで2000年に入ってから僕はもうハワイにいたんですけど、次期学長の選考が始まって各専攻から推薦を出せっていうことがあったんで、「天文科学専攻からは小平さんを出そうと思うけどいいですか」っていうからまあ反対はしないという返事だけしてあったんですよね。それで11月に日本に戻ったら総研大の評議会で最終選考に入って、12月に「決まったけど引き受けてくれますか」って言ってきたんで、じゃあ引き受けましょうっていう調子だったんです。まあ総研大の学長だったらJAXAの理事長なんかと違ってアカデミックだし、暇そうだから自分の好きな勉強もできるかもしれないと（笑）。

その頃、さっき言ったアンドロメダ星雲の南西部のディスクのいい画像が出てきたんで、総研大の学長になったらそれを詳しく見るっていうこともできるんじゃないかとも思っていました。実際は葉山に行ってから三鷹に通うのは大変だったけれども。それで僕は天文台の名誉教授ではあるけれど、僕が現役だったころに天文台談話会なんかに名誉教授と称する人が出てきてつまらない質問するのが気に障ってたから（笑）、そういうのには出ないと。だからそうっと行っていくんで土日に天文台に行って図書を使わせてもらうのと、それから当時は解析実験センターっていうってコンピュータシステムを置いてあった建物に行って、宮崎聡さんにアポイントを取っておいて、そのア

ンドロメダの映像をセットして、それを拡大して見てポジションをきちんと記録するっていうそこまで彼に見てもらって、あとはなんか事故があれば呼ぶけどそうでなければ夕方になって時間がきたらスイッチをクローズして帰るよっていうようなことで。その週末作業をどうでしょうねえ、半年以上1年近く続いたんじゃないかしらね。宮崎さんがよく付き合ってくれて。

それで天文台の台長だったときには昼休みに台長室ゼミっていうのをやってたんですけど、2001年に総研大の学長になった後はその時間に生物学を基礎から勉強して、こんな分厚いアメリカの大学の生物系の学生が使うようなのを仕入れて、それをずうっと学長でいた7年間勉強しました。

高橋: それはお一人で本を読んで勉強したんですか？

小平: そうです、ええ。それからその頃はね、僕が学長だった時には葉山セミナーっていうのをやって、これはっていうような人を呼んで話をしてもらってたんです。天文の人も1人くらい呼んだかもしれないけど、7年の間だいたい生命系の人を呼んで、そのときにいろいろ議論したり教えてもらったりしました。それから生命科学研究所っていうのが総研大の中にあって、基礎生物学研究所だとか遺伝学研究所だとかそういうのも入ってるわけで、そういうところの合同セミナー、ワークショップとかそういうのにも学長特権で顔を出して陪席させてもらって、時にはなんか変な質問をして怒られたこともありましたけどね（笑）。

高橋: じゃあ7年間勉強したり研究会に出てたりしたら相当お詳しくなって。

小平: そうですね。まあ細胞生物学、まあタンパク質構造論くらいまではわかるけれど、複雑になってきますからなかなか難しいですね。でもまあ生命がどういうケミカルなシステムで維持されていて、細胞の中の構造がどうなってるっていう働きがあって遺伝がどうだとか、そういうことは



写真1 「金曜バー」で話題提供する小平学長（2008年2月，小平氏提供）。

まあ耳学問で普通の天文学者よりはわかってると思うんですけどね（笑）。まあそういうことをやってたから、生命科学は総研大の現場でやらせてもらって、週末は天文学をやるってということで三鷹で測定をやって。それから毎週ではなかったと思いますが、「金曜バー」と称して金曜日の夕方に飲み物つまみ持参で気楽に集まって、あらかじめ決めておいた話題提供者が30-40分話をして、参加者が自由に歓談する集まりをやっていました（写真1）。総研大は多くの共同利用研究機関を基盤研究科・専攻として抱えています。葉山本部は場所柄からしてやや孤立していて、先導科学研究科の教員・研究員・院生などは近辺に下宿している人も多かったんで、その交流・親睦を図ると同時に学問面も含め、お互いの自由な意見交換の場として、僕の学長時代に導入したものです。

高橋：それは面白そうな集まりですね。いろいろな専門の人が集まっているからいいですよ。

●サマープログラム

高橋：総研大のお仕事はどうだったんですか？

小平：仕事はやっぱり難しかったですね。分野が非常にたくさんあって、それぞれの大学共同利用機関の歴史がみんな違うわけですよ。例えば核融合科学研究所みたいに京都大学のヘリオトロン

核融合研究センターと名古屋大学のプラズマ研究所、それから広島大学の核融合理論研究センターを全部合わせて大きな研究所を作ったところとか、それから高エネルギー加速器研究機構みたいに東京の田無の原子核研究所をもとにして作ったものとか。天文台はまあそれに近い格好なわけですよ。東京大学東京天文台だったのを、水沢緯度観測所をコアにして共同利用機関にしたんですから。それから愛知県岡崎市にある岡崎国立共同研究機構っていうのは、分子科学研究所・基礎生物学研究所・生理学研究所っていう3つの大学共同利用機関が共同で岡崎国立共同研究機構っていうのを作ったんですよ。それに比べて三島の遺伝学研究所っていうのは戦後にできた古い研究所なんです。それを大学共同利用機関っていうのができ始めた1980年代になって、大学共同利用機関にしたんですけど、あそこは場所が飛び離れてるんです。まあ核融合研も岐阜県土岐市で、生理研・分子研・基礎生物学は愛知県岡崎市にかたまってる。それから宇宙科学研究所も宇宙科学専攻で総研大の下にいますけど、そういうなんか歴史も違えば場所もばらばらっていう。

高橋：会議で集まるのも大変そうですね。

小平：ええ、それで学生教育もやるんですけど、やっぱり元は研究所だから研究者ばかりなんです。学生はマイノリティなわけで、学生にしてみるとやっぱり大きい大学での研究とは全然違うわけですよ。先生の方が圧倒的に多いわけで、学生は普段はまあ無視されてるっていうか。それを総研大としてはまあ1学期に1度でもいいから学生たちを集めて、少なくとも何十人かの集団にして学生たちで議論できるような場を作りたい。そういう意味で、できれば各専攻ぶち抜きで、自然科学系なら自然科学系、文系なら文系、それから年に1度くらいは文系と理系を渡すようなシンポジウムを開きたいとかね。そういうのがあったんですが、手足になるべき先生方っていうのはみんな一家言を持っていて、なかなかやっぱりそうはい

かないんですね。

高橋: まあ積極的な人もいればそうでない人もいます。

小平: 積極的な人がどうでしょう、数で言うとかやっぱり1%とか2%っていう感じですよ。だから自分のところの研究所にいる学生に仕事させたりはしますけど、なんか分野横断的に知識を広げるっていうような意味では自分の分野の仕事で一生懸命で、ほかの分野とは没交渉っていう先生が多くて、まあ苦労しましたね。毎回そういうのがあると学長が行ってよいしょよいしょと、積極的な先生の数が少ないわけですからそういう人たちを精神的にもサポートしてあげるっていうのでずいぶん努力しましたね。それがやっぱり学長をやって一番大切だと思いつつ、あんまりうまくいってない感じではなかったですね。

高橋: せっかくいろんな専門の人がいるなら、融合にはいい環境ですよ。

小平: それからもう1つ大きな仕事は、これは学振の関係なんですけど、日本学術振興会は今は独立行政法人ですけど前は文科省の一部でした。それで文科省になる前の科技庁がアメリカのマスターからドクターレベルの若い人を十数人日本に呼ぶっていうプログラムをアメリカNSF（アメリカ国立科学財団）から持ち掛けられて、科技庁が受けたんですね。受けたのはいいけど実際はどうしようかということになって、それが総研大にきたんですよ。総研大の傘下の大学共同利用機関がまあ20くらいあるわけだから、そこに1人くらいずつ割り当ててやりましょうということになって、総研大がその窓口になって始めたんです。そしたらそのうちに科技庁が文部省と一緒に文科省になった結果、元科技庁だけがやるんじゃなくて文科省全体でやるわけだから、範囲を広げましょうと。大学共同利用機関だけじゃなくて、国立大学どこでもいいようにしましょうっていうので、人数が増えて60人くらいになったんですね。僕が学長になった時にはそういうフェーズ

だったんです。

そしたら2002年に日本学術振興会は独立行政法人になって、行政法人としての事業をいろいろと見直したならば、アメリカ以外も先進国5か国とやりましょうってなって、カナダとイギリスと、それからドイツ、フランスを入れて5か国になったんです。それで5か国からそれぞれ学生を呼ぶっていうので、アメリカは大本だったから半分くらいの人数を背負ってたんだけど、他の国もそれぞれ10人とかで、だから全部で90人くらいになったのかしらね。それで学術振興会としては総研大に寄りかかって、これを総研大でオーガナイズしてくださいみたいなことで。だからまあ段取りは一応やって、1週間くらいオリエンテーションを葉山の方でやってですね、ホームステイプログラムとかも入れて。

高橋: ホームステイするんですね。

小平: ええ。土曜から日曜にかけてはホームステイ、それ以外は湘南国際村センターっていうところに泊らせて、1週間ね。それで日本語をやったり日本文化の紹介をしたり、日本の研究所のシステムを講義するような。そのうち2004年になったならば、総研大も含めて国立大学は法人になっちゃったわけですよ。それまでは国立大学ですから、文科省を通じていろいろ言われることをへいへいって聞く以外になかったんですけど、独立行政法人になったんで、同じ独立行政法人の日本学術振興会と交渉して、日本学術振興会のプログラムだけど、co-organized by総研大っていうサマープログラムの格好にして、それで僕がいるときにはフェローの数がもう100人超えてたんです。その先進5か国と、その後スウェーデンが入って6か国になったんですけど、そこから毎年120人くらい。それがだいたい湘南国際村の施設としてはキャパシティいっぱいなんですよ。

高橋: いろんな分野が全部一緒になってやるんですか？

小平: ええ、もう分野も色々ですね。そういう総

研大としての学融合の機能と、それから国際協力の側面とをジョイントしたようなプログラムにして、学術振興会からもちゃんと予算を総研大に渡してもらって、夏2か月のプログラムなんですかね。

高橋: 2か月もあるんですか？

小平: 2か月。飛行機賃と2か月の滞在費と保険だとか、家賃も含めて全部日本側が出す。

高橋: 日本が出すんですか？

小平: だからねえ、人気があるんですよ。いつも倍以上の応募があるんですけどね。ただ7月の初めにきて8月の終わりまでだから、日本としては一番住みにくい時期なんだけどもね。でもまあ100人くらいきて日本の生活は嫌だったっていう人は1割もないんじゃないかしらね。まあお小遣いまでもらって、少し節約すれば旅行もできるわけですから。

高橋: みんな集まって議論とか発表をするのと、いろんな研究所に散らばって研究してっていうのがあるわけですか？

小平: ある。みんな集まるのは最初の1週間で、葉山で総研大が面倒見てやって、一番最後に1日都内のホテルで発表会をやって、送別会をやる。サマープログラムはそれで終わるんだけど、ビザは3か月有効ですから、大概の人は1週間残ったり、お金を節約してもう1か月残っていくとか。ドイツの学生なんかはだいたい新学期が始まるのが10月ですからね、だから8月末にプログラムが終わっても、9月はまだ遊ぶ。遊ぶっていうといけないけど、残りの研究をその研究所でやるのかね。その期間にドクター論文を仕上げてる人もいろいろモチベーションですね。

高橋: それはいいプログラムですね。

小平: 総研大なんていっても日本じゃ知ってる人は少ないけれど、毎年100人外国の優秀な若い人がくると総研大って名前を覚えて帰りますから。10年やってると1,000人ですからね。それから葉山にいる間、参加者はほかの国の同業の人たちと

話せるし、自分の国の人でも今まで会ったこともない人と話せる。みんなEメールアドレスの交換をしちゃって、日本に滞在してる間に連絡とって一緒に富士山に登るとかさ、そんなことをやって帰った後もつながりがあって、それから帰った後、その2か月の経験をもとにポスドクとして2年間また日本の大学の研究室にくるとかね。ドイツから10何人かくると、半分以上はまたアプラインしてきますよね。

高橋: 日本を気に入ってもらえているわけですね。

小平: で、割合日本とドイツとは研究の仕方全然違えば大学のファシリティも違う。例えば日本では実験室なんか学生が掃除してるけど、ドイツ人が「あれで安全は大丈夫なのか」と。ドイツだとちゃんと掃除する人が掃除する。それから実験装置を整える技官の人がいるっていうふうなんで、日本にくると大学の研究室って学生がみんななんかやってるけど大丈夫ですかとかね。それから日本の学生は朝10時ごろにきて夜の10時ごろまでいるけれど、「ああいう人って社会生活は一体どうなってるんですか」とか(笑)。だから同年で比べると日本のドクターの学生の方が専門性は高いんだと思いますよ。だけど社会性は全然ダメですね。ドイツの学生はまあ大概大学にいる間に1年くらいは企業で実地経験を積んだり、実社会の仕事をしてますからね。だからまあ1週間あってもだいたい月火水木くらいは大学で研究をやってるけど、金土は企業で働くとか。

高橋: 社会と関わりながら研究してるんですね。

小平: だからまあ僕としてはこのプログラムを大切に思ってるんだけど、総研大の中では先生方や事務官にしてみると国から押し付けられた余分な仕事というふうに思ってる人もいてですね、毎年キープしていくのはなかなか難しい。ですから総研大のときの大きな仕事としては、いろいろ多様な専攻の先生方との付き合いをできるだけ学融合、ほかの分野にも関心を持ってもらうようにす

る努力と、それともう少し教育っていうかね、研究精神もいいんだけど、やっぱり立派な人間を育てるための教育というか、そういう観点で若い人に接してほしい。それで若い人たちが集まれる場所を作ってあげたいと思ったんです。そういう流れと、それと大学共同利用機関というのは国内の大学の研究者が共同利用しますけれど、その分野では外国からの窓口でもありますからね。例えば天文台だったら天文分野の対外国への窓口になるわけですから、そういう意味で総研大っていうのはもっと国際的な側面を出してもいいと思ってたけどなかなか出なくて、その1つがそのサマープログラムだったんです。

●独立行政法人化

小平: 総研大時代の3つ目の大きなことは、2004年の国立大学法人化ですよね。僕は天文台のすばるのときには胆石がたまって手術しましたが、総研大に移ってからはその手術がもともと腹膜が腸に癒着しててですね、腸閉塞になったんです。ちょうど法人化2004年の春、4月に移行しなくちゃいけないっていうときに、それがだんだん悪化して腸閉塞になって、2004年の5月かなんかに総研大の第1回の評議会を開くときには病院に入院しててですね。移行がものすごく大変で。総研大の場合、その基盤になっている研究所は研究所で大学共同利用機関法人っていうまた別の法人になるわけですよ。で、総研大の現場の教育は、その先生方がやるんだけど、それはうちの職員じゃないんですね。手当は出すんだけど、給料は共同利用機関法人の方からもらってるわけで、そういう変な二重制になってる。しかも大学共同利用機関の方が全体で1つの法人にならなかったんです。僕は大学共同利用機関が法人化するとき、その特別委員会の委員長をやらされたんですね、文科省から言われて。

高橋: ああ、国立大学が法人化する前に大学共同利用機関が法人化した、そのときの委員会という

ことですか？

小平: はい、日本全体の大学共同利用機関をどうするかというので、僕はドイツのマックス・プランク協会が頭の中にあったから、そういう協会があって政府と交渉してある予算枠を獲得して、その大きな傘の下で各研究所はかなりの独立性と自治性を持って機能するようなのがいいと思ってた。文科省の担当課もそういうイメージだったんですよ。ところがいざ特別委員会を始めてみると、やっぱりそのとき所長さんでいた人たちは、自分のポストがなくなっちゃうっていうか、上に1つできちゃうわけですよ。それがなんか面白くなくて……。

高橋: 自分がトップじゃなくなるということですか？

小平: そう、うん。それまでは国立だったんですよ。だから研究所が直接文科省と交渉してお金を取ってくるようだったのを、法人になると国が直にじゃなくて間に大きなアンブレラを作って、そこと国とが交渉をする。その中では自律性を持って法人としての運用ができるようになっていって、ドイツのマックス・プランクなんかはまあそうやってるわけです。国立大学はみんなそれぞれそのまま法人になっちゃって今はもう細くなって困ってるわけですけど、僕は特別委員会の議長としてなるべく1つにまとめようっていう方向で議論を運んでいました。マックス・プランク協会に関する勉強会を何度も開いたんだけど、やっぱり皆さんなかなかウンと言わなくて、結局4つになったんです。大学共同利用機関法人というのは4つあるんですよ。1つは高エネルギー加速器研究機構、それから国立天文台が入っている自然科学研究機構、人間文化研究機構っていう人文系の機構、それから情報システム研究機構っていう情報研・遺伝研・極地研・統計数理研究所っていう4つだね。そういうなんだかわかんない4つの機構に1年で移行しなくちゃいけなかったわけで、特別委員会の答申を9月までに出せっていうわけ

ですよ。夏中議論したけど埒があかない。それじゃあ法人化を全くやめるかっていうと、文科省側としてはここまでいろいろやってきてやっばりまとめる方向で考えてるから、まあ4つでも我慢しましょうっていうことになって、4つなんですよね。そうすると総研大っていう法人があって、その現場が4つの法人に分かれてるっていう変なことになっててですね。

高橋: かなり複雑ですね……。

小平: それでもう僕はその腸閉塞で入院してた病院から行った評議会でもって、その4機構長の方々に出てきていただいて、そこで総研大と協力するっていうサインをしてもらったんです。それでまあスタートしたんですけど、なかなか今もって難しいらしいですよ。だから僕は2001年に学長になって、2004年に法人化して2008年の3月まで勤めたわけですが、法人化した後は右も左も分からない。会計は企業会計でやれとか、運営費交付金っていうのができてなんか予算要求して余らしちゃいけないとかね。今は余らせられるんですよ。目的積立金とかいう中にね。だけど最初は余らせると余剰金だっていうんで召し上げられてしまうとかね。総研大っていうのは大学の中で運営費交付金の額で序列を作ると一番ビリなんですよ、確か。一番小さいと思います。というのは基礎的な教員経費っていうのは研究所が持っているわけですから、それが無いわけですよ。

高橋: 総研大の専任の方はいないわけですか？

小平: 専任は葉山に何人かいるんです。葉山に1つ研究科があって、そこの先生とかですね。それから全学教育を担当するような先生のポストっていうのは2つくらいあるのかな。だから専任の先生全部、准教授助教まで合わせると10か12は葉山についてるんですけどね。事務の数はい少ないんですよ、普通の大学に比べると。ただ入学試験だとか卒業とか、それから研究科教授会を開いて学位審査の結果を審議するとかね、そういう大学としての機能は総研大がやらないといけないんで

すね。国立大学の時は小さいとか大きいとか言っても、大学共同利用機関が基盤ですし、それも国立だったわけで、全部が国同士の中で回ってますから楽といえば楽だったんですけど、法人化後はやっぱり大変だったですね。どこの国立大学もこれからどうやって行くかっていうのを模索していく時代でしたから。そのときはまだ毎年1%ずつ運営費交付金を減らすとかいうことにはななくて、人を毎年減らされてたんですよ。だけどまあこんなので大学改革になってるのかなっていう気はもうその時からずいぶんしてましたね。だから法人としての大学運営っていうのをどうしていくかっていうので、僕がいる間はまだ暗中模索みたいな感じだったですよ。

高橋: さっき特別委員会の話が出てきましたけど、大学共同利用機関の法人化の議論と大学の法人化の議論はまた別なんですよ？

小平: 大学は別です。全然別です。大学はもっと大きいところで議論してましたね。国大協（国立大学協会）とかでも議論してましたけれど。文科省としては大学法人というのは国の教育目標のための行政法人で、その骨格作りをいろいろとやってる中で、大学共同利用機関を1つにしたいという意思もあって、そういう特別委員会を作ったわけですね。僕はその頃に科学技術・学術審議会の中の学術分科会っていうのがあるんですけど、そこの分科会長をやってたんですよ。そんな関係もあってそれをやらされて……。

高橋: 文科省は大学共同利用機関に1つの法人になってほしかったわけですね？

小平: まあだから行政改革の流れですから、できるだけシンプルな形にする。当時は20も機関があってそれぞれ所長がいて、事務を抱えててっていうのをできるだけすっきりした形っていうんで、文科省もマックス・プランク協会なんか念頭にあったんだと思うんですよ。あるいはアメリカのNIH（アメリカ国立衛生研究所）の中の研究所とかね。だから今はその半煮えで非常に不

自然な格好で、4つに分かれた格好になっちゃって、その4人の長がいろいろ個性を發揮しますから、自分の今いるポストがなくなるっていうのはやっぱり面白くないっていうか、気分としては反対っていうところなんでしょうけど。

高橋: 海部さんにお話を聞いたときもですね、海部さんは台長としてその法人化を迎えたわけですよ。海部さんもやっぱり1つにまとめようと努力したということで……。

小平: そうそう。海部さんからね、最後「もうこの辺で手を打たないとだめです」って電話が来たんですよ。海部さんは海部さんで近い分野の研究所長と打ち合わせみたいなことをやってたんでしょうけどねえ、やっぱり各所長さん、なかなかうんと言わないっていうそんな感じだったですね。そういう仕事得意な人がいるんでしょうけど、僕なんかやっぱり天文の研究者ですからうまくできないし、天文の研究とか息抜きで生物学の勉強とかやっているとハッピーなんですけど(笑)。

高橋: それでも総研大は国立天文台の台長の仕事よりは気楽でしたか？ そうでもないですか？

小平: 台長の時はやっぱりすばるを作り上げるというのが一番大きかったですね。それは天文台が東大から離れて大学共同利用機関になった試金石みたいなものだったし、大変は大変だったけれども、目標がはっきりしてるからそうつらく感じたことはなかったです。それに天文台の中に入ってから、台長室ランチタイムゼミなんかもやったりして研究者の顔も見えてましたからね。ところが総研大の学長ってのは研究者の顔がほとんど見えません。国立だった間は、まだ多少ゆとりがあって学融合とか国際化とか、そういう前向きな楽しみもあったけど、法人化1年前くらいからはね、そういう共同利用機関の再編始めいろんなが出てきて、行き先がよく見えないんですよ。法人化法人化っていう掛け声だけで、それで法人になったら自由になるんだっていう話だったのが、なってみると全然自由じゃないんですよ。事

務もねえ、ほかにやりようがないから結局本庁に做ってみたいな話で。学長としての仕事は法人化になってからは面白くなかったですね。だからまあ2008年の任期がきたときにまだ再選の余地はあったんですね、立候補すれば選ばれたと思いますけど、もう降りるといって若い人に譲ってくださいって。そのときには僕は70を超えてましたから。学生さん相手のお仕事だから、若くなくちゃだめですって言って降りたんですけど、もうたくさんっていう気持ちはありましたね。そういうことを言っちゃあいけないんですけど。

●総研大の起源

高橋: 総研大がそんなに複雑なものだとは知らなかったんですが、そもそも総研大ってどうやってできたんですか？

小平: それはね、僕が聞いてるところではですよ、最初にできたときはやっぱり国からの働き掛けもあったんでしょうけれども、大学共同利用機関というのは元々はどっかの大学の付置研究所だったわけ。例えば筑波の高エネルギー加速器研究機構は元々は田無にあった東大の原子核研究所だったわけですよ。するとね、その先生方はもともと東大の教授だったわけですが、大学共同利用機関になるとそうではなくなっちゃうわけですよ。東京天文台だってそういう問題があって、最後は徹夜でもめたわけですけど、要するに大学教授でありたいっていう人が多いわけですよ。それでいくつか最初に大学の付置研究所から大学共同利用機関になったところの先生方が、大学共同利用機関が持てる大学が欲しいって。総研大を作ったモチベーションの一番は要するに大学の教授資格をキープしたい。単なる研究者じゃなくて大学人でいたいっていうそういう声だったんですよ。

高橋: 天文台も教授とか准教授とかってあるわけですよ？

小平: それはそうでしょう。でも天文台教授なん

ですよ。大学教授ではないわけです。

高橋: 大学の教授ではないと。

小平: 大学教授でありたい。

高橋: そうなんですか。

小平: そうらしいですよ。そう僕は聞いてます。だから大学共同利用機関ができたのと同時にそういう声があって、別に総研大っていう自分たちの大学を作って、大学教授になって、自分たちの大学院生を持つっていう。それに対して東大の物理の先生方はじめたくさんの方々が反対を唱えられて、「そんなの大学じゃない」ってね。それで結局博士課程だけ、修士は持てないっていうことで折り合いがついたんですよ。それで長倉三郎先生が初代学長で1988年に開学してずうっとやってきたんですが、僕が法人化のどさくさに紛れて博士前期課程をつけて、5年間の大学院に変えたんですよ。

高橋: え、そうなんですか？ それまでは3年間の博士後期課程だけで？

小平: はい。

高橋: じゃあほかの大学で修士までやって、総研大に移るってことなんですか？

小平: うん。だけどそうするともう限られた人しかこないわけですよ。だから本当に学生採るのが難しくなってきたと思うんです。

高橋: そうなんですか。

小平: うん。文系は今でも後期だけしか採らないんですけどね。文化科学研究科はね、そんな学生の面倒を見るのは学者の仕事ではないって先生方がおっしゃる(笑)。

高橋: 理系だとむしろ学生がいてどんどん研究してもらってという感じですよ。

小平: そう。まあ総研大としてはその時に博士課程を5年間にしたんですが、もちろん2年修士をやったけれど、なかなか研究者として難しいっていう人はそこで中退になるわけで、博士前期の2年をやったっていう修士証は出します。だから今は分野によってですけども、大学院に行くとき

に大型装置とかいい文献資料とかをそろえてる総研大に行こうかっていう学生がきますよ。

高橋: 人数もそれに伴って増えたんですか？

小平: 学生定員はそのときは増やせなかったんですよ。だから5年間にしてもらえるけれど、今まで3年だったのが、5年になるから1学年の人数としては5分の3で6割くらいに減らすっていう。

高橋: そうなんですか。

小平: うん。在学する学生の総数を同じにすることでですよ。ていうのはそれがもとの、先生の数だとかそれから運営費交付金を算定するわけですよ。

高橋: じゃあ毎年の募集人数は減ったってことなんですね。

小平: そうですね。でもその移行期間のときがあったから、出ていく方が多かった年があるわけで、各専攻でどこぼこがあって天文みたいに少し余分に採るところもあれば、欠員が出るところもあるわけです。そういうので分野によっては新しい学生がこなくて困ってるところもあるって言ってましたけど、まあ基盤が大学共同利用機関ですからね、あんまり悪いところはないと思います。

ノーベル賞を取られた大隅(良典)先生は基礎生物学研究所で仕事をやられたんですよ。そこを定年になったんで東工大に移ったら、途端にノーベル賞で。東工大の先生がノーベル賞を取ったみたいに騒がれたんだけど、あの研究をされたときは基礎生物学研究所、総研大の先生だったんですよ。僕は自分が総研大の学長を退任できる時期になったときに、まず最初に「次の学長に推薦させてもらえませんか」ってお尋ねしたのは大隅先生だったんですよ。そうしたら大隅先生が、「それは大切なお仕事だけど私は研究を続けたい」っておっしゃられて。そのときはあのノーベル賞の対象になった研究をされていた頃ですからね。だから僕の場合はすばるができたんで、まあ総研大の学長に行く気になったけれど、なかなか普通の研究者で総研大の学長にっていうのはねえ、

そうやさしくはないと思いますよ。今の長谷川眞理子学長は、法人化にあたって葉山の研究科の改組っていか組み替えをするときに僕がお願いして応募して頂いた教授の1人だったんです。まあ個性の強い優れた先生ですから、自分でいろいろ構想されて走っておられるんで、それはそれで立派だと思いますけどね、今でも大変は大変でしょう。

まあ総研大時代はそういうところですね。終わるころには生物学の一応の知識は勉強して、天文学ではアンドロメダ銀河の密小星団の仕事をビリニウス天文台の連中（代表：ヴラダス・バンセビヴィシウス, Vladas Vansevicius）と共同でやって、そろそろ出版に漕ぎ着けていました（第9回参照）。だからApJの出版費は総研大から出してもらえるっていうことになって僕の主所属は総研大で出てるんです。

（第12回に続く）

謝辞：本活動は天文学振興財団からの助成を受けています。

A Long Interview with Prof. Keiichi Kodaira [11]

Keitaro TAKAHASHI

*Faculty of Advanced Science and Technology,
Kumamoto University, 2-39-1 Kurokami,
Kumamoto 860-8555, Japan*

This is the eleventh article of the series of a long interview with Prof. Keiichi Kodaira. He played a major role at the National Astronomical Observatory of Japan, and after a year of rest, he became the president of the Graduate University for Advanced Studies. He served as the president from April 2001 to March 2008, and this period was a period of turmoil when inter-university research institutes and national universities are converted into independent administrative agencies. Prof. Kodaira attempted fusion of academic fields and internationalization that make the best use of the characteristics of SOKENDAI.